

本田宗一郎という生き方

別冊宝島編集部 編

本書は、別冊宝島編集部が本田宗一郎の言葉と人生哲学を編集したものである。本田宗一郎は、戦後日本の経済復興を企業人としてリードしたパナソニック創業者である松下幸之助、ソニー創業者の井深大らと並んで誰からも名をあげられる本田技研工業を創業した人物である。本田宗一郎については数多くの著書があり、多くの方に感動をもって読まれている。今更本田宗一郎についてなんて古臭いと思っていたが、第4次産業革命と言われるAI、ビッグデータの時代にもものづくりがどのように次世代にかかわっていくのが気になっていた。その矢先に本書に出会い、ものづくりの第一人者である本田宗一郎の生き方に大きなヒントがあると思い直した。本書は2015年4月に刊行されていたが、このほど文庫化されたので紹介する。

序章は、「本田宗一郎 10 大伝説」として、アート紹介から始まる数々のオートバイ、自動車を世に送り出した歴史的な記述である。その一つの「傷だらけの左手」は、本田宗一郎の数々の著作の原点だと思っている『私の手が語る』の冒頭部分である。本田宗一郎の自分の左手のイラストがあり、「右手は仕事をする手で、左手はそれを支える受け手である。だから、左手はいつもやられる。つめなんか何度もぶち割って、そのたびに抜け替わったことか。よくもまた生えてきてくれたものである。指の先なども、ずいぶん削りとった。……左手の方が削りとられて短くなっている。すこしばかり指をつめたかたちになっている。左手は本当によく支えてくれた。』『私の手が語る』より

本田宗一郎は、「左手があるからこそやれる。人間の組み合わせもそうじゃないか。地味にやっている人たちがあればこそ何とかなる」と支

える人間があって自分があると言う。

第1章「人生の走路」と第2章「仕事の流儀」、第3章「組織と人間」は経営者としての本田語録である。「好きなことをして生きろ。お前のやりたいことをやれ。」という本田宗一郎の哲学である。そのいくつかを紹介する。

「需要を作り出す」の項では、需要とはアイデアと生産手段によって作り出されるものであり、模倣より独創性に価値が高く、これは仕事にも人生にも言える。また、「スーパーカップ」の項では、大量生産と独創性の両立に取り組み、商品を生産する時には模倣は許されない。あくまで妥協せず独創性を追求していかなければならない。「売れているからウチも」という安易な模倣に走る姿勢を否定し、「ものまね日本」と言われていた時代にいち早く独創的なモノづくりに挑戦していたのである。

社長を退いた後もものづくりへの執念は激烈である。「モルモット論争」の項では、時の著名な評論家が次のようにぶった。「ソニーは他のメーカーに先駆けている新しいこと（トランジスターによる製品開発）をやっているが、所詮は大企業が本格的に取り組む前の実験のようなものに過ぎない。」とこき下ろした。それに対して当のソニーの井深大は、むしろ世界に日本の技術が高く評価される結果となったとモルモットを肯定した大人の対応をした。しかし、本田宗一郎は我慢ができず「ソニーは自分の知恵と個性をフルに発揮して伸びてきたのだから、モルモットどころかパイオニアではないか。」と激しく反論し、モルモット論争となった。それぞれの企業が現在どのような状況下であるかを鑑みると感慨深いものがある。

本書はダイジェスト的な編集であるが、『私の手が語る』等と併用して読まれると本田宗一郎のものづくり論を詳しく知ることができる。（宝島 SUGOI 文庫、254 頁、580 円＋税）（田中正一）